世界名作劇場

プリンセス

# 小公女セーラ

『屋根裏は大混乱』(仮)

第 37 話

提供　ハウス食品工業

制作　日本アニメーション
　　　フジテレビ

脚本中西隆三

登場キャラクター（第37話『屋根裏は大混乱』（仮））

セーラ・クルー
ミンチン院長
アメリア先生
ベッキー
ピーター
モーリー
ジェームス
アーメンガード
ロッティ
（ラビニア）

（ジェシー）
（ガートルード）
花屋の小母さん
煙突掃除の少年ジム

エミリー（人形）
シーザー（猫）
メルの一家（ネズミ）

1 ミンチン女学院・裏屋根（朝）

教会の鐘が鳴り、雀たちが騒いでいる。

2 同・屋根裏部屋（朝）

ベッドに——ベッキーと、枕を分け合って眠っていたセーラ、はっと眼をさまし、半身起す。

セーラ「いけない、もう起きる時間なんだわ」

セーラ、急いでベッキーを揺り起す。

セーラ「ベッキー……ベッキー……！」

びくっと眼をさますベッキー——

ベッキー「は、はい、ただいま……」

起上り、セーラに気づく——

ベッキー「あ、お嬢様……一体、ここは？」

セーラ「私の部屋よ」

ベッキー「えッ……」

ベッキー、見廻す――床には真紅の厚いジュウタン、テーブル掛のかかった机には銀の食器やサンドイッチの残り、火の消えた暖炉の上には壁掛、全て昨夜のままである。

ベッキー「(茫然)私……まだ、夢を見てるんでしょうか……(頬をつねる)」

セーラ「(首を振る)いいえ、夢ではないのよ、ベッキー……昨夜、この通り魔法のごちそうが届いて、私たち、それを食べて、一緒にこの毛布で眠ったのよ」

ベッキー「ひゃあ……想い出しましたですウ」

ベッキー、セーラに続いてベッドを出ると、気になっているテーブルに近づく。

セーラ「(微笑)ね? 魔法は、まだ消えなかったのよ」

ベッキー「ほんとに……でも、急に、消えたりしないでしょうか……
私が、手を出すと……ぱっと……」
云いながら、残ったサンドイッチをパッとつまむ――
ベッキー「あ、消えません、お嬢様……」
急いでそのサンドイッチを口に放り込みムシャムシャ――
――
セーラ「(微笑) まあ、ベッキーったら……でももう、下へ行く時間
よ」
ベッキー「はい、お嬢様、直ぐ着がえて参りますから……」
ベッキー、もひとつサンドイッチをつまむと、急いで出
て行く――
微笑で見送るセーラ―― 掛けた服をとる。

3

同・ベッキーの部屋

パクッとサンドイッチを口に入れ、ムシャムシャやるベッキー、満足気に頷く。
ベッキー「矢っ張り、夢じゃないんだわ」
急いで服をとり、着換えにかかる。

## 4 同・屋根裏部屋

着換え終ったセーラ、ふと鼠の鳴声に振返る――
壁穴の前で――メルの一家が背伸びして餌をねだっている。
セーラ「まあ……あなたたちの事をすっかり忘れていたわ……ごめんなさい」
セーラ、サンドイッチの最後のひと切れをとると、メルたちに与える――
その時、ノックの音がして、着換えたベッキーがのぞく。

ベッキー「お待たせしました、お嬢様……」
セーラ「あ、いま行くわ」
　　メルの前から立つと、ドアへ行く――
ベッキー「でも、お嬢様……」
　　室内を指す――
ベッキー「この魔法、消えないとようございますねえ」
　　セーラ、室内を振返ったが、微笑で、
セーラ「大丈夫よ、ベッキー……きっと消えないと思うわ……さ、行かなくては」
ベッキー「はい、お嬢様……」
　　二人、ドアを出て行く――
　　×　　×　　×
　同時に天窓が開き――音もなく飛び降り立つラム・ダス、天窓に合図する。
　続いて天窓から飛び降りて来る若いインド人召使――

暖炉の灰を片附けはじめる。
ラム・ダスは、テーブルのスープの容器を頭上に差上げる──
天窓で、受取る老インド召使いの姿が見える──
ラム・ダス、テーブル掛の銀食器をまとめ出す──

5 同・台所

鼻唄で野菜の皮をむいているテーブルのベッキーと──
ー炉の前で、鍋の火加減を見ているセーラ。
入って来るモリーとジェームス、一瞬ギョッと立尽す。
ベッキー「あッ、お早うございます！」
セーラ「（も振返り）お早うございます、モリーさんにジェームスさん」
モリーとジェームス、唖然と顔を見合せて近づく──

ジェームス「こりゃ驚いた……お前、病気の方はもう治ったのか」
セーラ「はい。熱も下りましたし……もう、この通り元気になりました」

また顔を見合せるモリーとジェームス。

モリー「ヘエエ……病み上りで、おまけに朝ご飯前だってのに、よくまあそんな元気が出るもんだねえ」
ベッキー「あの、それはですね……」
セーラ「ベッキー……！」
モリー「フン、判ったよ。なにを隠してるか……さ、おいで！」

いきなりセーラの腕を摑んで引立てる。

セーラ「あ、モリーさん！」

連れ出されるセーラ――

ベッキー「お、お嬢様……！」
ジェームス「お前は、ここで働くんだよ！」

襟首を摑まれて素っ飛ばされるベッキー。

| 6 | 同・三階廊下 |
|---|---|

自室のドア前で、鋭く見返すミンチン。

ミンチン「なんですって?……セーラは、仮病だったたって云うんですか」

前に、セーラの腕を摑んだモリー。

モリー「そうとしか思えませんよ。院長先生……きっとベッキーと一緒に屋根裏で盗み喰いを続けてたんでございますよ!」

セーラ「ち、違うんです。私、熱が引いて……」

ミンチン「モリー、調べてみる必要があります……さ、来るんです!」

ミンチン、屋根裏階段の方へ――

モリー「さ、おいで!」

モリー、セーラを引立てて続く――

一方の自室の前で、茫然と見送るアメリア――急いで追う。

7

同・屋根裏部屋

暖炉の上の壁掛を外す若いインド人召使と、床のジュータンをまるめるラム・ダス――ラム・ダス、はっと気配にドアを振返り、低く叫ぶ。

ラム・ダス「急げ！」

8

同・屋根裏への階段

勢込んで昇って来るミンチンと、蒼然たるセーラを引立てて来るモリー。

9

同・屋根裏部屋の前

昇って来たミンチン、ガッとドアを開ける――

絶望に立尽すセーラ──

10

同・屋根裏部屋

天窓に──一瞬、ラム・ダスの脚が消えて、音もなく閉される。

× × ×

一歩入って、部屋を見廻すミンチンと、続くモリー──セーラ、茫然と見る。

× × ×

ベッドに、あの新しい毛布はない──机はむき出しで、テーブル掛も食器もない。暖炉の灰は片附けられ、壁掛もなく、床の真紅のジュータンも見当らない。

× × ×

ミンチン、ジロリとモリーに眼を移す。

ミンチン「モリー……」

モリー「は、はい、院長先生……」

ミンチン「お前の勘違いだったようですね」

モリー「は、はい……申訳ございません」

その背後から、そっと顔を見せるアメリア——

アメリア「お姉様……でも、よかったじゃありませんの、セーラさんが治って……この学院から悪い病気が出たなんて噂が立ったら、それこそ大変でしたもの」

ミンチン「アメリア……！」

アメリア、ビクッと黙り込む——

ミンチン、焦立ってセーラに向直る。

ミンチン「人騒がせな！……お前のお蔭で、この私がどれ程心配したか、知ってるんですか……お医者代だって馬鹿にならなかったんですからね！」

セーラ「は、はい……」
ミンチン「判ってたら、その分、働いてお返し！」
セーラ「は、はい、院長先生……」
セーラ、急いでドア外へ——追い立てるように続くミンチンとモリー。

11 同・裏屋根の上

天窓の一角から窺っていたラム・ダス、ほっと身を引く——

12 同・一階廊下

同・一階廊下振鈴を鳴らすアメリア。

13

同・地下の食堂

ベッキーとセーラが、パンをテーブルの皿に配り、スープを注いでいる――

そこへ、ガヤガヤと入って来るアーメンガード、ロッティ以下の女生徒たち。一瞬、セーラの姿を見て棒立ちになる。

ロッティ「セ、セーラ・ママ……！」

アーメンガード「セーラ……！」

二人、わっと駆け寄る――

セーラ「ロッティ……アーメンガード……」

他の女生徒たちも一斉にセーラの傍に駆け寄る――

×　　×　　×

その時、ひと足遅れて入って来るラビニア、ジェシー、ガートルード――　女生徒たちに取囲まれたセーラを見

て、愕然と立停る。

× × ×

アーメンガードたちに囲まれたセーラ。

アーメンガード「だけど、セーラ……無理したりして、ほんとにもう病気はいいの？」

セーラ「（微笑）有難う、アーメンガード、この通りよ……きっと、あなたの叔母さまが作って下さったお薬が利いたんだと思うわ」

アーメンガード「よかった！」

ロッティ「わあい、セーラ・ママの病気が治ったーい！」

× × ×

顔を見合せるラビニア、ジェシー、ガートルード——

× × ×

その時、入って来るミンチンとアメリア。

ミンチン「なにをしているんです！」

女生徒たち、一斉に自席へ坐る——

ミンチン「セーラ！……お前は、仮病を使ってまで仕事をなまけるような人間です。もう年少組にフランス語を教える必要はありません。台所で働くんです！」

——暗然と立尽すセーラ。

ざわめく女生徒たち——茫然となるアーメンガード、泣顔のロッティ、冷やかに顔を見合せるラビニア、ジェシー、ガートルード。

セーラ、そっと台所の方へ出て行く。

急いで続くベッキー——

14

同・台所

焦々とセーラに当り散らすモリーとジェームス——

モリー「全く、お前のお蔭で、こっちまで院長先生にドヤされちまっ

たよ」
ジェームス「さあ、モタモタしてねえで、買出しに行ってくるんだ！」
セーラ「はい、ジェームスさん……」
ベッキー「あの……私も一緒に行って来ますです」
モリー「なんだって？」
ベッキー「お嬢様は、まだ病み上りですし、若し途中で倒れるような事があると心配で」
モリー「フン、まだそんな事云ってんのかい。行きたきゃ勝手におし。その代り帰ったら二人ともこっぴどくこきつかってやるから」
蒼然と顔を見合せるセーラとベッキー。

15 同・表

買物篭を抱えたセーラ、ベッキーと上って来る――ふっと隣家の窓を見る。

――白カーテンに閉されている。

ベッキー「お嬢様……また、お隣りの御主人の御病気を心配なすってるんですね」

セーラ「え?……ええ……」

ベッキー「(微笑) 大丈夫、きっといつか良くなられますよ。さ、参りましょう」

セーラ、頷いてベッキーと街路へ――

## 16 クリスフォード家・居間

カーテンの蔭で、じっと見送るラム・ダス――炉辺に車椅子のクリスフォード。

ラム・ダス「若しかすると、あの少女は、御主人様の好意と感附いてしまったのかも知れません……今も、ずっとこちらを見ておりましたから……賢い少女です……」

クリスフォード、撫然と頷き返している。

（中 C M ）

17

ある裏町の一角

煙突掃除の道具一式を担いだ顔中真っ黒のやや年長の少年ジムを摑えて、ピーターが頼み込んでいる——

ピーター「頼むよ、ジム……云う通りにしてくれたら、今度市場で野菜を大負けしてやるからさあ」

ジム「弱ったなあ。いくら友達でも、素人を相棒にしたなんて判ったら、親方にドヤされちまうからなあ」

ピーター「大丈夫さ。黙ってりゃ判りやしないよ。恩に着るぜ、ジム兄い」

ジム「へへ、お前にそこまで云われたんじゃ、断る訳にも行かねえなあ。ようし、俺もロンドンッ子だ、引受けたぜ」

ピーター「有難え、これで決ったたな……ええと、そうとなったら……ちょいとごめんよ」

ピーター、ひょいと手を出すと、ジムの真っ黒な服にこ

すり、その手で自分の顔をなで回す——忽ち、ススで
真っ黒になる。
ジム「おいおい、ピーター、なにしてんだよ」
ピーター「なあに、仕事はじめのお化粧って奴さ」
ピーター、また相手の服に手をこすり、自分の顔になす
る——

18 コベント・ガーデン市場の一角

花屋の前に来ているセーラとベッキー。
セーラ「まあ……では、ピーターは、今日はお休みなんですか?」
小母さん「そうなんだよ、セーラさん……あんたが病気とかって聞いてから、なんだかあの子、すっかりおかしくなっちゃって
さ」
セーラ「まあ……」

小母さん「兎に角、店番頼めば、お釣り間違えるし……」
セーラ「それで、ピーターは一体どこに……」
小母さん「さあ……どこへ行ったんだかねえ……」
唖然と顔を見合せるセーラとベッキー。

## 19 ミンチン女学院・使用人階段の下

威丈高なモリーの前に、それぞれ道具を担いだジムと、背中にくっついて窺う顔中まっ黒にススで塗ったピーター。
モリー「フン、あいにくだけど、煙突掃除なら、今間に合ってるねえ」
ジム「そんな事云わないで、掃除させて下さいよ。メイド頭さん……石炭の燃え方だって、グッと経済的になるんですから」
モリー「フン、そんな事、私の知った事かい……さ、お帰り」
ピーター、慌ててジムの背を突つく。

ジム「あの、それじゃ、料金を特別にお負けしときますから」

モリー「しつっこいねえ……そんな事して貰ったって、私が一ペニーでも得する訳じゃないだろ」

ピーター、小突く――

ジム「じゃ、お礼を払いますから……」

モリー「お礼だって？……」

モリーの態度がニタリと変る――

モリー「そりゃ、確かだろうね」

ピーター、小突く――

ジム「そりゃ、勿論ですとも、メイド頭さん」

モリー「判ったよ……今、院長先生に話してみるから、そこで待っといで」

ジム「へえ、どうも……」

モリー、中へ入って行く――

ほっと白い歯を見せて顔を見合せるピーターとジム――

20

同・院長室

デスクから振返るミンチン――

ミンチン「なんですって？……子供の煙突掃除が？！」

ドアを背に、ニコニコ来ているモリー。

モリー「はい、院長先生……仲々よく働きそうな連中ですし、第一、煙突を掃除しますと、グッと石炭の燃え方が経済的になりますですから……」

ソファアで、シシュウの手をとめたアメリアが口を出す――

アメリア「お姉様……ここ暫く、煙突掃除は検約してましたし、シーズン前にきれいにした方がいいと思いますわ」

ミンチン「フン、余計な事を……この所かかりがして煙突掃除どころではないのです」

モリー「でも、院長先生、特別料金と申しておりますんで」

ミンチン「まﾞ、いいでしょう……その代り、料金はもう一度値切るのですよ」

モリー「はい、院長先生……」

## 21 同・三階の廊下

眠っているシーザーが眼をさます——

× × ×

階段を上って来るモリーとジム——遅れて窺いながらピーター。

モリー「院長先生には、やっとの事で頼んであげたんだからね。それを忘れちゃ困るよ」

ジム「へえ、判ってますとも……」

二人、屋根裏への階段口へ——

遅れて続こうとしたピーターの足許に、シーザーが鳴き

ピーター「シッシッ……黙ってろってば……」

ながらすり寄る。

鳴いてまつわりつくシーザー――

ピーター、急いでジムとモリーを追って屋根裏への階段口へ飛び込み、扉を閉める――追って来て、ガツンと扉にぶつかったシーザー、怪訝にピーターのあとを見送り、首を傾げて鳴く。

22 同・屋根裏部屋の前

階段を上って来るモリーとジム、ピーター、戸口の前に来る――

モリー「さ、この部屋の天窓から、煙突へ行けるからね」

ジム「へい、判りました……」

ピーターも叩頭――モリー、戻って行く。

顔を見合せるピーターとジム。

ジム「（低く）ピーター、お前の云うお嬢さんって……」

ピーター「（低く）ああ、この部屋で寝ついてる筈なんだ……」

ピーター、そっと扉を開ける――

23

同・屋根裏部屋

入って来たピーターとジム、唖然――ベッドには、無論セーラの姿はない。

ピーター「おかしいな、どこへ移っちゃったんだろう」

ジム「ピーター、兎に角仕事にかかるぜ」

ピーター「ああ……」

ジム、机と椅子を台にすると昇り、天窓を開けて屋根に出て行く――続いて昇るピーター。

24 同・裏屋根の上

天窓から出て来るピーター――既に屋根に立ったジムが、

ジム「じゃ、俺はこっちをやるから、お前はそっちの煙突を頼むぜ」

ピーター「ああ、任しといてくれ」

ジム、軽やかに一方の煙突へ――

ピーター、怖々屋根を伝うと別の一方の煙突にたどりつく――

――眼下に見える高さ。

ピーター、思わず眼をつぶると、ワイヤーブラシの先を煙突に突込み、夢中にこすり始める。

25 同・ラビニアの部屋

暖炉前で、菓子を食べていたラビニア、ジェシー、ガートルード、突然、暖炉から吹き出して来たススの煙に悲鳴——

## 26 同・裏屋根の上

ワイヤーブラシを引抜いたピーター、今度は、並んだ隣りの煙突に突っ込む——

## 27 同・院長室

暖炉の傍で、帳簿をめくっているミンチン——突如、暖炉の口から、ワイヤーブラシの先端と共に、真ッ黒なスス煙りが吹き出して来る。

ミンチン「プワッ……ア、アメリア！……アメリア！」

あわてて口を押え、アメリアを呼ぶ――

28 同・裏屋根の上

引抜いたワイヤーブラシを、更に別な煙突口に突き入れるピーター――

29 同・台所

炉の焚口をのぞいているジェームスとモリー――

モリー「おかしいねえ、こっちはまだなのかしら」

ジェームス「早く掃除させねえと、夕食の支度が遅れちまうぜ」

突然、焚口からブラシと共に吹き出す黒いスス煙り

二人、もろに顔面に、

ジェームス「プワッ!」

モリー「ぺぺぺッ……」

× × ×

その時、買物から帰って来たセーラとベッキーが、驚いて戸口に立尽す――

× × ×

モリー「な、なんだよ、そんな所に突っ立ってて……帰ったら帰ったと……」

セーラ「あ、すみません。ただ今帰りました」

モリー「フン、今煙突掃除人が来てるからね屋根裏へ行って、も少し静かにやるように云って来とくれ」

セーラ「は、はい、モリーさん……」

30 同・三階廊下

上って来るセーラと、ベッキー。

31

同・屋根裏部屋

入って来るセーラ——続いてベッキー。
丁度、天窓からピーターと、続いてジムが降りて来る——

ピーター「あ、お嬢さん……！」
セーラ「えッ……あ、あなたは……？」
ピーター「オレですよ！　ピーターですよ！」
セーラ「まあ、ピーター……！」
ピーター「オレ、お嬢様の事が心配で……でも、よかった、元気になってくれたんですね！」
セーラ「有難う、ピーター……あなたがベッキーと一緒に頂いて来たお薬のおかげよ」
ピーター「うわあ、やったあ！」
跳び上るピーター——微笑するセーラ。

唖然となるジムと、ベッキー——

32 同・表全景（夜）

ミンチン女学院の灯りは次々に消え、隣家のクリスフォード家の居間の窓にだけ灯りが洩れている——

33 同・地下の洗場（夜）

皿や鍋を洗っているセーラとベッキー。
モリーと眠そうなジェームスが顔を出す。

モリー「それじゃ、ススで汚れたものは、明日の朝までにチャンと洗い直しとくんだよ」
セーラ「はい、モリーさん」

モリーとジェームス、去る——

ベッキー「ウフッ……でも、お嬢様、ピーターがあんな恰好で来るなんて、驚きましたねえ」

セーラ「（微笑）ほんとに、私も、誰だか判らなかった位よ」

二人、声をしのばせて笑い合う――

## 34 同・三階の廊下（夜）

手燭を手に、セーラと上って来たベッキー、屋根裏口の扉前で、ふっと立停る。

ベッキー「お嬢様……」

セーラ「え……」

ベッキー「あの魔法は、もう、消えてしまってますですよね」

セーラ「さあ……消えてないといいのだけれど……」

ベッキー「いいえ、きっと消えてますです……おばあちゃんだって、云ってましたもの……世の中そう甘くはないって……」

セーラ「まあ……兎に角、行ってみましょう」

セーラ、扉を開ける——

35

同・屋根裏部屋の前（夜）

上って来るセーラとベッキー、はっと見る—— ドア下から洩れている灯り。

ベッキー「まあ、誰か来ているんですわ」

セーラ「シィッ……」

セーラ、そっとドアを開ける——

36

同・屋根裏部屋（夜）

入って来たセーラとベッキー、唖然。

—— 昨夜より更に豪華に飾られた室内。

セーラ「まあ、魔法は消えなかったんだわ……いいえ、もっと立派に飾ってあるわ！」

ベッキー「お、お嬢様……」

セーラ、ベッドに行く——二人分の毛布と美しい枕が並んでいる。

セーラ「見て、ベッキー、あなたの分もあるわ」

ベッキー「まあ、どうしましょう！」

セーラ、テーブルに行く——二人分の食事の仕度。

セーラ「ほら、食事も二人分よ！」

ベッキー「ほ、ほんとに！」

セーラ、はっと気づいて置いてある本を取る——

セーラ「まあ、本まで……」

セーラ、開いて見る—— 見返しにカード。

To the little girl in the attic
From a friend

セーラの声がかぶる――

セーラの声「屋根裏の少女へ、友より」

セーラ、本を閉じる――

セーラのM「あの方だわ……きっとあの方の贈物なんだわ」

茫然と本を胸に抱き、天窓を見上げる。

37 同・裏屋根の上（夜）

一瞬下からの光茫から身を引くラム・ダス――微笑でそっと去る。

（第三十七話　終）